

『トンカ』—「他者」の言葉について

濱崎 桂子

1. 序

ローベルト・ムージルの初期の短編集『三人の女』¹⁾に収められた3編の物語では、それぞれの登場人物たちの身の上におこる、彼らの生活原理と日常をゆるがすような体験が描かれる。このような日常からの脱却を体験する登場人物達はみな男性であるが、彼らが異質な要素を持った女性達、すなわち「他者」に出会うことは、彼らがそれまでの生活原理に安住できなくなることを意味している。「他者」を体現するそれぞれの女性達は、いくつかの「他者」たる性質をそなえている。本論では、3編の最後に収められている『トンカ』をとりあげ、この作品に描かれる「他者性」を「言葉」を手がかりに検討したい。作品における「他者」の言葉を問題にする際、ここでは二つの意味での「言葉」が問題となる。すなわち一方には、物語世界の中で登場人物たち—「他者」であるトンカと、この「他者」に出会う“彼”—が持っている「言葉」があり、もう一つ「他者」を描き出そうとする、作品を構成している「言葉」が存在する。しかし、いうまでもなく前者は、後者によって成立させられているものであり、両者をまったく別のものとして扱うことはできない。不必要な混乱を避けるために「登場人物の言葉」はそれとして扱うことにするが、この「言葉」はいつでも作品を構成する「言葉」に内包されていることに留意したい。

1) Musil, Robert: Drei Frauen. In: M., R.: Gesammelte Werke in 9 Bdn. Bd.6

Hrsg. v. Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978.

以下、引用に際しては(S. 270)とのみ示す。訳文は筆者による。

作品を構成する言葉は、次のように始まる。

ある垣根のほitori。一羽の鳥が歌った。太陽はするともう茂みの向こうのどこかに沈んでいた。鳥が黙った。夕方だった。農家の娘たちが歌いながら野を越えてきた。なんて細かなこと！ こういった細かいことがひとりの人間につきまるとして離れないとすれば、それはたわいのないことだろうか？ 服にくっついてしまう草の実のように!? それがトンカだった。無限性というのは、しばしば滴となって流れるのだ。(S.270)

鳥、沈んだ太陽、歌、そして沈黙。いくつかのイメージが羅列されているが、このイメージのそれぞれをつなぐ説明的な文章はない。次の瞬間には、これらの小さく細かなイメージが何を意味しうるのか、語り手が自問しており、このイメージが重要なものなのか、読者もまた困惑させられる。「それがトンカだった」という文の、「それ」が指しているものも明確ではなく、タイトルにその名がとられている登場人物「トンカ」は、なかなか読者の前に姿を現さない。ここに並べられたイメージは、積み重ねられることによって輪郭が曖昧になってゆくセロファンに描かれた絵のようである。しかし、この曖昧なイメージも、すぐに次のように否定される。

しかし、一体本当にそうだったのだろうか？ いや、これは彼があとになってから作りあげたことだ。それはまったくメルヒェンだった。彼は、もう判別することもできなかった。本当のところ、彼が彼女を知った当時、彼女は叔母の家で暮らしていたのだ。[...] そうだったのだ。(S.270)

トンカにまつわる不完全な印象は、一度書き留められ、すぐに「そうだったのか？」と疑問視される。この問いに対してすぐに、'Nein' という答え

が与えられ、このイメージが“彼”によってつくられたもので、何の確実性もないことが説明される。そして、どんなイメージも決して確固とした輪郭も足場も与えられず、再び「滴となって」流れていってしまうのである。

「トンカ」とは、一体どんな人物なのか。この作品全体が、この問いについての“彼”の思考であり、しかもその思考は定点を失って浮遊している。トンカと出会い異質なものを体験することで、“彼”の思考は大きく揺らぎ、言葉、認識、社会での位置、すべてが変化を余儀なくされる。この体験については、ほとんど“彼”の視点で語られており、その意味で中心的な登場人物は“彼”であると言えよう。また確かに、トンカが思考したり行動したりする描写は、“彼”についてのそれに比べれば非常に少ない。それでは、その変化をもたらしたとされるトンカについては、本当に多くは語られていないのだろうか。勿論そうではなく、たとえ彼女自身の言動がアクティブでなくとも、描写され、思考されるものの中心となっているのはトンカであり、だからこそ彼女の名前が作品のタイトルとなっているのである。

つまり「トンカとは一体どんな人物なのか？」という問題設定は、作中の“彼”だけのものではなく、我々読者のものでもあるのだ。しかし、“彼”の思考によって描写されたトンカの姿を、読者の側ではっきりした輪郭を持った人物として描こうとすることは、しまい込まれていた古いジクソーパズルを、それもピースが完全にはそろっていないもの、それどころか余分な手製のピースまで入ってしまったようなものを完成させようと試みるに等しい。作品にちりばめられたイメージから、トンカのいくつかの側面をとらえることはできるが、それは決して完全な像を結びはしない。「彼はどの側から近づいても、結局いつも彼女の精神の変わらぬ不透明性のまえに立ち尽くす」(S.274)ように、読者も又、その「不透明性」

の前に途方に暮れることになる。「彼」にとって、トンカは当然のことながら異性であり、社会階層が違い、ものの考え方、用いる言葉が違う。そして、何よりもこの「不透明性」のために、トンカは「彼」にとって理解しがたい「他者」であった。

しかし、読者としての我々は、「無限が滴となって流れる」というこの一文を、言葉の持つひとつの可能性として解釈することができるように思われる。言葉によってつくられるひとつひとつの細かな、そして固定され得ないイメージを検討することで、文学の言葉が日常世界に対して提示しうる「別の可能性」を見ることができるのではないだろうか。

2. 「他者」としてのトンカ：トンカの名前をめぐって

まず、トンカという像を名指している言葉、彼女の名前について考えてみたい。というのも、虚構の世界の人物に与えられた名前には、その像の持つさまざまな性質の、かなり重要ないくつかを担う場合があると思われるからである。トンカの名前については、テキスト中、2カ所で言及されている²⁾。まず、「トンカ」が彼女の正式の名前ではないことが述べられる。彼女は、正しくはドイツ語で「アントーニエ」という洗礼名を持っていて、そのチェコ語の愛称「トニンカ」を、さらに短縮した呼び名が「トンカ」である。

彼女が、普段は正しい名前と呼ばれていないという状況をまず問題としたい。人がきちんと名前と呼ばれないという状況については、大きく分けて二つの解釈の可能性があるだろう。ひとつの可能性として、正式な名前が、人格と離れがたく結びついている場合がある。そこでは、「呼ばれているもの」と、「(正式ではない)呼称がさしているもの」との間にずれがあると考えられる。つまり、本来彼女は、ドイツ語の名前を持った「ア

2) vgl. Musil S.272 u. S.279.

ントーニエ」であり、「トンカ」とは他者が用いている呼称にすぎない。この場合、「トンカ」という名前は、ドイツ名を持つ少女の名に異国の響きを与え、本来「内側」にいる人間を「他者」として規定しているということになる。

もう一つの可能性として、正式な名前よりも、通常の呼称のほうが、より身近に、より深く「呼ばれているもの」を規定しているとも考えることもできる。その場合には、彼女は、終始「トンカ」というチェコ語の愛称で呼ばれてきたのであり、彼女の人格は、他のどんな名前よりもこの「トンカ」という異国の響きに結びついている。洗礼名、つまり正式に届けられた書き言葉であるドイツ語の名前は、彼女を社会的に規定こそするが、日々の生活の中で形成されてきた彼女の人格とは、むしろ疎遠であるのだ。そうだとすれば、彼女はドイツ語名で洗礼を受けてはいるものの、ドイツ語が話される社会で、やはり「他者」として規定されていることになる。ここで第一の解釈と違うのは、その「他者性」が単に周囲に規定されているだけでなく、その周囲から規定された「他者性」が、すでにトンカの血肉となっている点である。

彼女の姓についての描写を見ると、そのことがより印象的に、そして明確に描かれているように思われる。彼女の姓がチェコ語であることは、彼女のルーツが外部にあることを示す。インテリである“彼”がチェコ語を解さないことからしても、この都市でチェコ語を話すということはマイノリティーであったと推測できよう。ドイツ語圏の都市（おそらくウィーン）において、ドイツ語とチェコ語は決して対等ではあり得ない。そのことは、彼女が育った界限についての描写を検討すれば明らかである³⁾。市民の家庭に育った“彼”にとって、売春宿などが立つこの地域は、「恥」の匂いのする心理的に遠い場所であった。売春婦や、受刑囚の女など、社

3) vgl. Musil S.271f.

会の周辺にある女性達が生活する境界で話されている言葉として、この言葉は、それを用いる者が都市社会の周辺に属していることの刻印となっているのである。

トンカが生まれ育ったこの境界では、ドイツ語とチェコ語、「二つの言葉の奇妙なミックス」がはなされている。この独特なあいこの言葉がどんな言語なのか、具体的には説明されない。たとえば『グリージャ』では印象的に描かれるように⁴⁾、奇妙にひびく方言独特の発音や、独特の語彙といった具体的な例はみられない。つまり、このテキストで扱われるのは、ドイツ語とチェコ語とが混在するとどのような言葉が生まれるのかという言語上の問題ではない。むしろ、この言葉が象徴として持っている意味が重要なのである。

チェコ語の姓を持ち、チェコ語の呼び名を通常使っているが、ドイツ語の洗礼名を持っているというトンカは、いわば「二つの言葉の奇妙なミックス」の一例である。その言葉は、マイノリティー、すなわち社会の「他者」であるという性質をもっていながら、ドイツ語圏のなかに息づいており、二つの言語の間、すなわち周辺と中心との境界線を曖昧なものとしている。その存在は二義的で、明確な説明を拒みつつ、社会の周辺に潜んでいるのである。

彼女の「夢のような」、「彼は歌った”あるいは、“彼は野を越えてきた”を意味する」姓も又、トンカの性質の重要な要素を表現している。特に「歌」という要素については、後で触れることになる。

3. 「他者」の言語

3. 1. 「他者」と言語ゲーム

前章では、トンカの名前にみられる特質を検討することで、彼女が社会

4) vgl. Musil S.245 u. S.247.

の中での「他者性」を担わされていることを確認した。ここでは、彼女の「言葉」と「他者性」を関連づけて考えたい。彼女の独特な「言葉の使用」について考える際、ヴィトゲンシュタインに基づいて柄谷行人が述べている次の言葉が手がかりとなるように思われる。

対話は、言語ゲームを共有しない者との間にのみある。そして、他者とは、自分と言語ゲームを共有しない者のことでなければならない。⁵⁾

ここで、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」理論に深く立ち入ることは避けるが、簡単に柄谷の議論をまとめてみる。ここで柄谷によって用いられている用語は、ほとんどが後期ヴィトゲンシュタイン、それもおもに『哲学探究』⁶⁾のなかで用いられている用語に依拠している。

通常、2人の間の対話が成立するためには、両者が理解できる共通の言葉話し、共通の意味を持った概念を用いて話すことが必要であると想像される。柄谷は、こういった通常の手話共有するもの同士の会話は「他者」のいない独白にすぎないと考える。「言葉」を交換すること、すなわち対話することは、本来もっと危険なゲームである。柄谷は、これを「貨幣」の物神化を成立させるメカニズムで説明する。つまり、相手と自分との間に「共通の言葉」が存在することは、市場経済における貨幣の価値が信じられているのと同じように、日常使用されているものでありながら、論理的には何の確実性もない事柄なのである。貨幣が今日流通するのは、明日もまたこの貨幣が流通するであろうという信頼があるからであ

5) 柄谷行人 探究I (講談社学術文庫) 1992 (単行本は1986年)

[以下、柄谷] 11頁。

6) Vgl. Wittgenstein, Ludwig: Philosophische Untersuchungen In: W., L.: Werkausgabe in 8 Bänden Bd. 1 Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1984.

なお、同書からの引用は(W: § 7)のように、パラグラフ番号のみを示す。なお、訳文は筆者によるが、次の訳書を参考にした。

藤本 隆志訳 : ヴィトゲンシュタイン全集 第8巻『哲学探究』(大修館書店) 1976。

る。今日、商品との交換で「他者」から百円を受け取るとき、明日「他者」に同じ価値を持つものとして渡すことができると信じているからこそ、交換が成立する。しかし、そこには本来百パーセントの確実性はない。同じように、ある言葉が相手に同じ意味をもって伝わると信じることは、ただそれを成立させている社会の慣習を信じているのにすぎない。私が「犬」を意味して発したイヌという音が、「他者」にも「犬」を意味するものとして受け取られると信じること、この信頼を成立させているのは、相手と自分が同じ規則の言葉と話しているという証拠のない前提である。つまりこのような対話においては、「共有された」言葉話す「共同体」が捏造され、話している相手が「他者」であることが隠蔽されるのである。

このような場において、「我々の言語を理解しない者、たとえば外国人」(W. § 20) は、「私自身の“確実性”を失わせる他者」である。自分が通常用いている言葉を理解しない相手に会うことによって、自分の依拠している言語の規則が限定された場でしか成立しないことに気付かされるのである。相手に言葉が通じないことが意識されたとき、「対話」を成り立たせるには、自分の言葉の規則を相手に「教える」ことが必要となる。このとき、「教える」人間は、けっして「学ぶ」人間に対して優位にあるのではない。言語ゲームを共有しない「他者」が、そのゲームの規則を学ぼうとするかどうか、その「合意」が得られるかどうかは、常に不確実なのである⁷⁾。

このような「他者」との出会い、文字どおり「我々の言語を理解しない外国人」という具体的な状況以外でも常に起こりうる。私が意味している「犬」と、「他者」が受け取っている「犬」とが、おなじ「犬」である確実性はどこにもない。そのことに気がついたとき、つまり、共通の言語

7) 柄谷 特に7～30頁。

ゲームが成立しない場にあることを認識したとき、私は、「他者」に言葉を「教え」ようとすることによって「他者」に出会う。そこでは、自分の言葉の意味が相手に理解されるかどうか分からないという不安定な状況の中で、言葉が交換される。絶えず相手の言葉の意味を探ることによって、また自分の言葉を吟味することによって、それぞれに異なる言語について思考することを余儀なくされるのである。そこに生じる、それぞれ異質な言語ゲームのせめぎあいこそ「他者との対話」なのである。

3. 2. “彼”の言葉と彼女の言葉

それでは、最後まで“彼”にとって不可解な「他者」であったトンカと“彼”とのあいだには、どんな「対話」がなされているのであろうか。2人がそれぞれ異なる言語ゲームに属しているとするのならば、どんな違いが2人の間にあったのだろうか。トンカと“彼”との「対話」を描写する次の文章は、両者の言葉に対する態度の違いを端的に示している。

当時2人はすでに、「お互いに完全に結ばれる」ということについても話をした。つまり — 彼が話して、トンカは黙って聞いていたということである。(S.286)

2人の会話は、いつも「彼が話して、トンカは黙って聞いて」成立している。2人の関係において、今後の生活を分ける大きな決断について話し合われる時にもやはり“彼”が話し、トンカは黙って聞いているのである。たとえば、祖母の死後、勤め先を失ったトンカの面倒をみるという“彼”の申し出に対して、トンカは「はいとも、いいえとも、ましてありがとうとも」(S.281)言わない。「この瞬間、トンカが彼の申し出をあっさりと承知したために、むしろ不審になった」と、“彼”が考えるほどである。ト

ンカのこのような沈黙は、彼女を把握しようとする“彼”にとっては試練となる。彼女の言葉はいつもあいまいであり、トンカが本当に“彼”を受け入れているのか、“彼”は確信することができないのである。

トンカは、決して通常の意味で言葉に不自由だったわけではない。しかし、テキストで何度も言及されるように、トンカはしばしば、意志表示をしない、うまく話すことができない存在として描かれている。そして、このようなトンカの存在は、“彼”にとって理解の難しい「他者」となる。トンカの「他者性」に遭遇した“彼”の様子は次の引用部分に印象的に描かれている。

「ほくの言っていることは、ちっとも分からないのだろうね。君。ほくは自分の祖母のことを悪く思っているのではないんだ。違うんだよ。彼女だって、かわいそうな人だ。だけど今は、こちらの方については考えないんだ。それがほくのやり方なんだよ。今は、あなたの側から考えるんだ。そうしたら、おばあさんは醜い塊さ。これなら分かるかい？」

「ええ。」娘は小さく答え、そしてすっかり赤くなった。「あなたが言いたいことはずっと前から分かっていました。でも、言えなかったんです」今度は彼の方が笑った。「そんなことは僕の身にはまだ起こったことがないよ。何かを言うことができないなんて。そうだとすると、君がなんと答えるのか是非知りたいな。手伝ってあげよう。」彼が、完全に彼女の方に向き直ったので、彼女はますます途方にくれてしまった。(S.275)

トンカの「ずっと前から分かっていたんです。でも言えなかったんです」という答えを聞いて、「そんなことは」経験したことがない“彼”は笑い出す。この笑いは、単純にものが言えない彼女を嘲笑するものではない。むしろ、自分にはこれまで想像のつかなかった「何かを言えない」という

経験を目の当たりにした驚きが、彼の口から「言葉」ではなく、「笑い」を呼び起こしたのである。しかし、ここでは“彼”はまだ、「話すことができないこととは何か」という問題について、(予感こそされてはいるが)考えるまでには至っていない。つまり、“彼”とトンカの「言語ゲーム」の規則の違いに“彼”は気づいていないのである。そのため、トンカが考えていることを「言語化」しようと“彼”はさらに試みるのである⁸⁾。

それでは、“彼”自身の言葉とはどんなものだったのだろうか。大学で、将来有望な化学者の卵として研究している“彼”は、「冷静でドライな、すばらしく新しい技術者精神に満ち」(S.283)、「明確に解決できない問題には耳を貸さな」かった。つまり“彼”にとって、すべては解決され、説明されなくてはならなかったし、そうでないものを憎みさえしたのである。“彼”がどんな言葉で、“彼”の思考を語ってきたのか、そのヒントは次の一文にある。

男は新聞を読むし、決まった目的を持った団体にも属している。そして胸の内を偉大なる言葉でいつも一杯にしているのだ。(S.270)

“彼”の胸の内を満たしている偉大な言葉と、トンカの言葉の違いは、先の引用部分の続きで明らかにされている。ここでは、2人がそれぞれ「仕事」という概念をどのような意味で用いているかが示されている。

老人の世話という仕事が退屈ではないかと問う“彼”に対し、トンカは「好きで仕事をしています」と答える。しかし、「偉大な言葉」で仕事を語る“彼”にはその答えでは不十分であった。彼自身が携わるべき仕事と

8) トンカを笑う“彼”は、「言語ゲーム」の違いを予感こそしているが、だからといって自分の「言語ゲーム」の規則を明示できるわけではない。柄谷 75頁参照。

して抱いていたものは、次のようなものだったのである。

彼は、新しい発明のアイデアを持っており、博士課程の後、さらに1、2年専門の研究に従事し、それから若い人たちが、眼前に輝きと不確実性が混在した未来を見るあの輝く水平線を超えて、とどまることのない自信を持って上昇していくことを望んでいた。(S.284)

“彼”がなすべき仕事は、学問の世界でも歴史的な仕事になると考えられており、その前途は揚々としている。トンカに仕事についての質問をするとき、“彼”は、自身の「仕事」概念をそのまま援用して考えている。“彼”にとっての仕事は、目的と意義のある、そして前向きに進歩して行くべきものであった。トンカにとっての仕事の意義なるものを見いだそうとする“彼”は、次のような問いを掛ける。

「人生には仕事以外のこともあるだろう？」

「平穏な、規則正しい義務 […] は、多分きみにとっては悦びなんだね？」

「日々の仕事以外のことを全く求めない人もいるけどね。 […] つまり、望みや、夢や、名誉欲なんかだよ」(S.275)

“彼”が、答えとして期待していたのは、トンカが退屈な祖母の世話のために割いている時間を埋め合わせるような、何か説得力のある、仕事の意味のようなものであった。答えにふさわしいような「言葉」、かわいそうにトンカには自由に操れないらしい「偉大な言葉」を教えようと、“彼”はトンカをさらに問いつめる。

「君がなんと答えるのか是非知りたいよ。手伝ってあげよう。」(S.275)

執拗な“彼”の質問にますます困惑するトンカは、次のように働く理由を言葉にする。

ようやく、答えが出てきた。ゆっくりと。くちごもりながら。まるで、何かとても理解するのが難しいことを、分かりやすくしなければならぬように、言葉を正しながら。

「でも、いくらか稼がなくてはいけないの」(S.275)

トンカは、“彼”のように「偉大な言葉」を胸に抱いていないだけではない。「仕事」という言葉の持つ意味が、“彼”の場合とは決定的に違うのである。

この意味の違いについて考えるにあたって、ヴィトゲンシュタインの「言葉」および「言葉の意味」をめぐる言説はひとつの手がかりとなるだろう。『哲学探究』によれば、「言語を話すということは、ひとつの活動ないし生活様式の一部」(W. §23)であり、「言語ゲーム」とは「言語と言語の織り込まれた諸活動との総体」(W. §7)である。つまり、ここで「言語」とは、音声あるいは文字として表現される言葉に限定されず、言語を成立させる行動様式、その使用なども含んだものである。さらに「語の意味とは、言語内におけるその使用である。」(W. §43)とされているように、言語とその意味とは、言語が使用される過程において成立する。つまり、用いる者の行動様式、またその使用の仕方によって、それぞれの言語の意味が規定されるのである。

この概念を用いて言い換えるならば、“彼”とトンカ、それぞれが使用している「仕事」という語は、それぞれの生活様式、行動に規定され、違

う「使用」のされかたをする単語なのである。トンカは日々しなければならぬ仕事を、大仰な理念で飾りたてることをしない。仕事は生活する手段として、不可避のもの、当たり前なものとしてトンカの日常なのである。そのため、トンカにとって「仕事」とは、改めて定義づけたり、説明したりする必要のない概念であった。それは、上で見たような“彼”の「偉大な言葉」で語られる「仕事」という単語とは、その使用が違うのである。

もう一点重要なのは、この時点でトンカがすでに、“彼”と自分の言葉の差異を予感しているということである。彼女が「何かとても理解するのが難しいことを、わかりやすくしなければならないように、言葉をただしながら」話すとき、自分の言葉が“彼”には伝わらないかもしれないという危険性を、十分に意識している。そのためトンカは多くを話さない。一方の“彼”は、自分の言葉をさらに言葉によって定義づけようとし、そのために使用する「偉大な言葉」の有効性を信じてもいる。しかし、トンカの持つ言葉は、決して言葉によって説明されることがなく、また彼女は自分の言葉の有効性を信じてもないのである。

ここで、次の点を確認しておく必要がある。この二人の言葉の違いは、そもそも「偉大な言葉」を持っているか否かという問題、すなわち、知識、あるいは能力の差ではない。それは、「言葉」をどう使用するかという生活様式の問題なのであり、つまり、彼らのものの見方の違い — 物事を説明的に認識するか、あるいはあるがままに受容するか — の現れなのである。この点について考えるために、もう一例、二人の持つ言葉の性質の違いを検討してみたい。

“彼”は、トンカとの散歩の時に、彼女に言葉を与える二度目の試みをする。

夕方になると、空気がちょうど顔や手と同じような温もりに感じられ、また歩きながら目を閉じれば、自分が溶けてゆき、際限なく漂っているかのように思われる。彼は、こんなことをトンカに説明したが、彼女が笑ったので、言っていることが分かるのかとたずねた。

ええ、それは。

しかし彼は、信用できなかつたので、彼女に自分の言葉で説明するように言った。そして、彼女にはそれができなかつた。

それでは、彼女には理解できないのだ。

いえ、できるわ。―そして急に―：歌わなくちゃ。(S.276)

心地よい夏の夕方の体験を、“彼”は言葉で描写し、トンカに伝えようとする。繰り返し言えば、感情や体験を顕在化させ相手に伝える手段は、“彼”にとって「言葉」である。そのため、トンカが自分の言葉で感情を表現できないということは、彼女がそれを理解していないこととイコールであると“彼”は考える。しかしトンカはそれに反論し、「歌わなくては」と言って彼を驚かせる。トンカにとって、自分の感情を表現する手段は言葉だけではない。彼女が小さな声で恐る恐る歌い始めた民謡の素朴なメロディは、「日の光の中のものしろちょうの様に哀しく」、「今度は突然ではあるが、もちろんのことトンカが正しい」のである。この歌は、彼の言葉にとって決定的に異質であり、いままで言葉をもって説明してきた体験領域を超えたものである。まさに全く異質なトンカの「生活様式」を体現しているこの歌をきいた瞬間、“彼”は自分が言葉にできない状況に陥ったことを意識するのである。

ここで、歌われている民謡のテキストについて言及されていないことは、示唆に富んでいる。つまり、ここではテキストの言葉のもつ何らかの意味内容が“彼”に作用を及ぼしたのではない。文字として書き留められ

る概念的、説明的な言葉に対して、トンカの歌は、人々の記憶として歌いつがれてきた口承の民謡である。そのテキストは彼女ひとりの言葉ではなく、人々の記憶を紡ぎ、人々に歌われることによって紡がれてきたものである。つまり、トンカはこの夏の夕方の体験を、彼女自身の言葉で文飾化するのではなく、時と場所を越えて歌い継がれてきた普遍的な歌で表現した。だからこそ、この歌はトンカの心情にも、そして“彼”の体験にも近づき得たのである。この歌によって、“彼”は、言葉を持たないトンカを、言葉で説明するのとは違う仕方ですら理解するのである。

さらに、トンカがテキストをドイツ語に翻訳すると、つまり、彼女の言葉、あるいは彼女の歌を“彼”の言語に置き換えると、“彼”とトンカの距離は劇的に小さくなる。“彼”は、彼女と手を取り合い、共にこの歌を歌うのである。繰り返していえば、トンカは単にチェコ語をドイツ語に置き換えたのではない。トンカは、そのチェコ語の姓が示唆していたような「歌のことば」は、言葉で説明されないトンカの感情を“彼”にそのままの形で受け渡すための媒体となっているのである。ここではトンカが、「恐る恐る」“彼”に「言語ゲーム」の規則を教えているのだと解釈できる。“彼”が、あくまで自分の言葉の基盤を疑わず、トンカに“彼”の言葉で語らせようとしたのと、それは全く異なったコミュニケーションの方法である。しかし、この歌は“彼”にとっての大きな転換点となる。

自分に何が起こったのか、表現できないのは今度は彼であった。そして、トンカは、普通の言葉をお話せず、なにか全体の言葉といったものを話すために、馬鹿だとか、鈍感だとか思われ、苦しまなければならなかったのである。(S. 276)

自分の表現ができなくなった“彼”は、すなわち、自分の言葉の限界に思

い至るわけだが、それは同時にトンカの言葉、つまり「他者」の言葉に出会うことであった。トンカの持つ「異質な言葉」に出会うことで、同時にこれまで自分が盲目的に従ってきた自分自身の言葉の規則⁹⁾にも気づくのである。

3. 「全体の言葉」あるいは沈黙

3. 1. 「全体の言葉」すなわち疎外される言葉

上の引用で、トンカの言葉は「全体の言葉」と名付けられている。次に、このトンカの言葉と「普通の言葉」との差異について考えたい。なぜ、その言葉のゆえにトンカは苦しまねばならないのだろうか。

まず、彼女自身を苦しませることになる、トンカの言葉の性質を見てみたい。言葉によって引き起こされるトンカの苦しみは、世話をしていた老人の死とともに訪れる。トンカに祖母の形見を分ける際、“彼”の母は、次のようにトンカを非難する。

「彼女は、これに見合うようなこともしていませんよ。感情もないんだからね。おばあさまが亡くなったときも、埋葬の時も、涙一つ浮かべていないのよ。」(S.280)

この母親の言葉に対し、「簡単に泣けない人もいるよ。そんなの証拠にならないさ」と“彼”は反論する。トンカの普通でない言葉に気づき始めた“彼”には、トンカの言葉と“彼”の親類の言葉の違いが明確にみえるようになってきている。ここで、親類が使用している市民の「言葉」には、たとえば「人の死を悼む時には涙を流す」といったルールも含まれる。親戚達は、形見分けの席で器用に言葉をあやつることで自分の利益を守る。この

9) ヴイトゲンシュタイン §219を参照。

言葉は、“彼”が依拠していた科学的で明晰な言語ではない。むしろ「話すことができるということは、思考の手段ではなく、資本であり、人を感心させるための装飾であった」(S.280)のだ。この意味で「なんとトンカは無口だったことか！」と彼が言うのは、すなわち、トンカは自分の利益を守るすべとしての言葉を持たないということである。たとえばトンカは、仕事先で昇給を要求することができない。また、感情を「普通言葉」で表現できないために、上に引用した母の言葉に見られるように、「馬鹿で鈍感」であるとみなされる。つまり、共通の言葉を持たないものとして社会から排除されるのである。

この状況は、トンカの説明されない妊娠と、性病とでより深刻になる。医学的には、この妊娠と性病が“彼”によるものではないことが明らかである。明晰で疑いようのない事実を説明する言葉と、表現されないトンカという言葉とどちらを信じるのかという難題が“彼”につきつけられるのであるが、トンカは、ここでも社会に対して自分の身を守るための言葉を持たない。

科学的説明を求められたとき、トンカはあくまでも沈黙し「私を信じないのなら、私を追いやって下さい」(S.295)とだけ答える。医学的な事実をくつがえすような説明も、また彼女のあったかもしれない浮気を正当化するような言葉もそこでは話されない。そこにただ全体として存在し何も語らないトンカは、問題を「信じる」というレベルに置き換えている。「他者」である彼女を信じるかどうか、それは流通するかどうか分からない貨幣の価値を信じるかどうか、という問題である。「彼女の言葉による真理」(S.295)は、医学上も、哲学的にも、そして勿論社会的にも受け入れられない。ある言語ゲームの規則を共有している、“彼”の母や医者に代表される社会の共同体から彼女は疎外されるのである。それに対して、彼女の言葉の真理を裏付けるのは、つまり社会の規則に対し彼女の側に軍配を

あげることができるのは「彼女の人格の真理」でしかない。そこにある彼女自身を受け入れるか否か、それがトンカの示した言語ゲームのルールである。

トンカは、彼女自身が「他者」を理解するときにも、このルールを実践している。ここまでは、“彼”の「他者」理解のみに焦点を当ててきたが、「他者」に出会うことで自分の確実性が失われているのは、トンカもまた同じである。いや、むしろトンカこそ、“彼”と出会うことで、引き返しようのない転換点を体験したとさえ言える。相手を理解するということについてのトンカの姿勢を、次の例は印象的に描いている。

彼は彼女の手を撫でた。「僕たちはうまくやっているとと思うよ。トンカ。だけど、僕の言っていること分かるかい？」

しばらくたってトンカは答えた。「私があなたの言っていることが分かるかどうか、そんなことはどうだっていいんです。どちらにしても、私には答えられないわ。ただ、あなたが真剣なのが好きなよ」(S.278)

トンカを言葉によって理解しようとし、トンカに言葉を求めていた“彼”とは、全く違う他者理解の姿勢がここにはある。「あなたの言っていることが分かるかどうか、そんなことはどうだっていい」という発言は、一見、“彼”を理解すること自体を放棄しているかのような印象を与える。しかし、「言語ゲーム」と「他者」の問題に即して考えてみると、このトンカの言葉はまた違った意味を帯びてくる。

“彼”が、トンカを何とか自分の「言語」に組み込むことで理解しようとしているのに対し、トンカはそもそも「言語の共通性」を前提していない。この引用の直前に「彼が何について話しているか、彼女には分からなかった。けれど、とても真剣に霧を通して迫ってくる彼の言葉を、彼女は

察知していた。」とあるように、「彼の言っていることが分からない」ということは、トンカにとって絶対的な理解の不可能性を意味するものではない。むしろ、“彼”が言葉に表さなかった部分、“彼”とトンカを包んでいる「霧」、つまり“彼”と彼女の間に存在する磁場のようなものも含めて、真剣な「生活様式」を持った“彼”を認めるのである。

「全体の言葉」を持つトンカは、「他者」の理解の仕方も“彼”のそれとは違っている。トンカはやはり彼女の方法で“彼”を理解するが、それは、言葉による説明によってではなく、そこにあるものとしての“彼”を無条件に受け入れることであった。だからこそ、“彼”が、仕事を失ったトンカを引き取る際、「行動の自由、精神、目標、名誉心」といった「偉大な言葉」を用いて、2人の生活のスタートを必死で意味づけようとし、またトンカがこれを誤解しないかと恐れているのに対し、トンカの答えはただ一言、「分かっています」だったのである(S.282)。

しかしこのあまりに単純なトンカの答え、つまり「全体の言葉」は、先に述べたように“彼”に受け取られることなく、2人の間にぽっかりと浮いてしまう。トンカは、その歌、あるいはたった一言、「はい」や「いいえ」、あるいは「分かっています」という言葉で、彼女なりの意志表示をしていた。しかし、(大きく揺らいでいるとはいえ)社会に共有されている言語の側に立つ“彼”にとって、これらの言葉は事実を確定するような意味を持たない。“彼”の前にあるのは、不透明で曖昧な「沈黙」のみである。

3. 2. 「沈黙」すなわちエトランジェの言葉

この「沈黙」こそ、彼にとってはトンカを理解する際、最大の障壁であった。では、何故トンカは多くを語らなかったのか。これまでも示唆的に述べてきたが、トンカは自分の言葉が相手に伝わらないかもしれない

危険性を予感している。それは、自分の言葉がいつも真剣には受け取られず、承認されなかった彼女の経験に培われたものであるのかもしれない。そのことは、トンカの社会の中での位置と決して無関係ではないだろう。

社会の周辺にある者たちの「沈黙」について、クリステヴァは『外国人』の中で「[...] 二つの言語の間で人は沈黙をおのが領分とするようになる。」¹⁰⁾と書いている。クリステヴァはここで、祖国を捨て、母国語を捨てて西欧（ここではフランス）へ亡命した者について語っている。つまりここで「二つの言語」とは、捨ててしまった母国語と「新しい道具」としての外国語をさす。外国人は、「いつかは完全にこなせるようになるはずの他人の言語」を、結局はいつまでも「おかしな抑揚、どこの国のでもなく、今度の言葉よりは前の言葉の片言に近いようなもの」で、つまり「不自然な言語、人工器官」を用いて話すことを強いられている。決して流暢には話せない外国語をもてあそびながら、そして理解されない母国語、「自分の中に隠して置かねばならない」言葉をかかえながら、外国人は沈黙するのである¹¹⁾。

トンカもまた、具体的な言葉のレベルでチェコ語とドイツ語という二つの言語の間に立っている。それだけではなく、トンカは、彼の科学的な言葉とも「偉大な言葉」とも違い、“彼”の母の自分の利益を守る言葉とも違う「全体の」言葉を持っている。つまり、トンカの「沈黙」は、さらに「普通の言葉」と「全体の言葉」という二つの言語の間に立たされていることによって生じているのである。

しかし、ここで厳密に考えておかなければならないのは、トンカの「沈黙」は母国語（トンカの場合は「全体の言葉」）を隠すことで生じているのではなく、「沈黙」そのものがトンカにとっての表現手段であるという

10) ジュリア クリステヴァ（池田 和子訳）外国人 我らの内なるもの（法政大学出版局）1990 22頁。
【以下 クリステヴァ】

11) クリステヴァ 21～23頁。

ことである。クリステヴァも、一つの意志表示としての沈黙について、次のように続けている。

そもそも沈黙は外から押しつけられたものとはばかりは言えない、それは内在しているのだ。発言拒否、口を開こうとしない苦悩にびったりと身を寄せた傷だらけの眠り、ずたずたになった誇らかな慎みという私有地、うむを言わせぬ光。それがこの沈黙だ。言うことは何もない、見渡す限り何もなく誰もいない。完全無欠。侵入不可能な沈黙。冷ややかなダイヤモンド、秘宝、大切に保管されていてとても手が届かないもの。何も言わない、言うべきこともない、言葉になるものはない、というのだから。¹²⁾

社会の言語ゲームから疎外されたトンカの苦悩は、口を開かない。それが彼女にとって「苦悩」であったのか、さらには「苦悩」という単語がトンカにも同じように用いられるのかさえ、“彼”にもそして我々にも明らかではない。外部からのアプローチを拒み、秘宝のように自分の言葉を守っているその沈黙は、その存在を言語化することを、拒否しているのである。この、「沈黙」という形でのトンカなりの存在の表明に思い至ったとき、“彼”の問いは次のような言葉になる。

なんて、トンカは無口だったのだろう！彼女は、しゃべることも泣くこともできなかったのだ。けれど、話すこともできず、口にされることもない何か。人々の中に黙って消えていくもの。人類の歴史を記した板にある小さく刻まれた一筋の線。そんな行い、そんな人、夏の日の中、一人落ちてきたそんなひとひらの雪は、現実だろうか、それとも幻覚だろうか。善だろうか、価値のないものか、それとも悪か？(S.280)

12) クリステヴァ 23頁。

自ら語ろうとせず、また、語られることさえ拒否するような存在としてのトンカは、奇跡のように、真夏の雪としてどこからか地上に降りてきて、そして瞬時に消えてしまうのである。このような「他者」に出会ってしまった“彼”は、それでも彼女についての考えをめぐらせようとするとき、「言葉」をもってトンカの存在について問いかけることによってしかアプローチできないのである。

4. 結語：語り得ないものについて語る試み

3章の終わりに引用した「話すこともできず、口にされることもない何か」についての問いは、すなわち“彼”のトンカをめぐる問いかけの言語化の始まりである。トンカという「他者」の言語ゲームと出会い、自分の言葉の限界に気づかされた“彼”は、別の言葉、すなわち別の認識を求めようとする。

2人は、心を開いて話すべきだったのだろう。しかし、時間だけが前向きに過ぎていった。彼の中の影が、何か非現実的なものが、言葉を求めている。

すべてを全く違う価値観で測らなければいけないのだという認識が現れようとしていた。けれどそれも、ものを認識することがすべてそうであるように、曖昧で、不確実だった。(S.301)

これまで、「感情を破壊」し、明確な問題だけを扱ってきた“彼”は、臨月も近くなったトンカを目の前にして、彼女と話すべき言葉をなくしている。同時に、“彼”の内部に生まれた「非現実的なもの」は、別の言葉を求め始める。しかし、「全く違う価値観」による認識を表現するであろう

言葉は、これまで“彼”がたやすく扱ってきた言葉のように、よどみなく話されたりしない。トンカの言葉を信じることもできず、また医学の言葉を信じ、トンカに手切れ金を渡して別れることもできなかった“彼”は、いたわりの言葉も、また、彼女を責める言葉も口にすることができなくなっているのである。しかし、このような状況にあっても、「言葉」は、“彼”の思考と表現の手段として生き続ける。

トンカの病院のベッドで、彼はほとんど話さなかったので、彼女宛の手紙を書いた。この手紙には、普段は黙っているようなことをたくさん書いた。偉大なる恋人に書くようにおおまじめに書いたので、もう少しで「君を信じているよ」と書くところだった。[...]これらの手紙は、確実に彼の意見だというわけではなかった。むしろ書くよりほかは何も役に立たない状態であった。まだこういった状態があつて、自分を表現することができることがどんなに良いことか、彼はそこで気がついた。トンカにはできなかったのだ。この瞬間、彼は彼女をはっきりと理解した。夏の日の昼中、たった一人落ちてきたひとひらの雪だったのだ。(S.304)

「書くよりほか何も役に立たない状態」を手紙として書き、思考を続けていくこと、また、その思考を言葉として「書くこと」は、まだ“彼”の役に立っている。このような曖昧な状況において、むしろ「書くこと」は“彼”をつなぎとめる一本の救命ロープのような役割さえ果たしている。そのことに気がついた瞬間、“彼”は「話すこともできず、口にされることもない」トンカ、すなわち、“彼”と全く言語ゲームを共有しないトンカの本質に思い至るのである。しかし、この理解は一瞬のものである。夏の日に落ちてきた雪のひとひらは、言葉で書きとめようとした瞬間溶けて形を失い、滴となって再び形を定めずに流れ出していくのである。

しかし、ここで明らかになるのは、“彼”はどんな場合でも“彼”なりの「言葉」のほか、手段を持たないということである。明解な科学の言葉から脱却した“彼”は、曖昧で不確実な認識の試みを続けつつ、トンカにまつわる記憶を言葉として紡ぎ出す。そして、まさにここから、トンカをめぐるこの物語が始まっているのである。始めに引用した物語の冒頭の語りは、そんな“彼”の新たな言語ゲームの獲得の第一歩として読むことができる。新たな言語ゲームとは、すなわち「新たな行動様式」にほかならない。

トンカについて回想しつつ語る“彼”は、自分が体験した印象を振り返り、不透明なトンカという存在について問いをたてる。語り手が自分の体験について回想する物語の場合、「回想する」語り手は、しばしば「体験している」語り手よりも、物語世界での出来事について多くの知識を持っている。しかしこの物語では、語り手である“彼”にとってのトンカの姿は、時間を経た後もなお、不確実なままである。回想する“彼”は、自分には見えなかった、そして今も把握できないトンカの姿について思考を続けるのである。“彼”は、自分の頭に浮かぶイメージを書き留め、そのイメージについて問いをたて、その問いについて考えることしかできない。「一体本当にそうだったのか?」、「この考えはどこに行き着くのだろう」(S.272)と“彼”は自問を続けるが、この“彼”の疑問に答えを与えてくれる第三者としての語り手は登場しない。曖昧なものについての不確実な思考の流れが言語化されると、かつてトンカの言葉がそうであったように、「ゆっくりと。くちごもりながら。まるで、何かとても理解するのが難しいことを、分かりやすくしなければならぬように、言葉を正しながら」の語りとなる。曖昧で不確実なものについて語ろうとするとき、それは平叙文の羅列にはなり得ないのである。

この短編に特徴的なこれらの疑問文は、自分の言語の基準となるものを

失った彼の確実性の危機の現れであるともいえる。しかし、異なる言語ゲームの間の「対話」という観点からみれば、この危機は否定的にのみとらえられるものではない。そもそも、自分の言語と「他者」の言語の差異そのものに気づいていなかった“彼”は、自分の言語ゲームを実践こそしていたものの「知って」はいなかった。しかし、共通の言葉を持たない「他者」と出会うことで、そして、異質な言語ゲームに接触することで、“彼”には自分の言語ゲームについて反省する必要が生じたのである。この「他者」との出会い、その「対話」の試みを通して“彼”に見えたのは、“彼”が盲目的に従っていた言語の規則、すなわち生活様式の限界であった¹³⁾。「私自身の“確実性”を失わせる他者」は、同時に私の「言葉」の新たな跳躍を可能にする「他者」なのである。

それ以来、彼はいろいろなことを思いついた、そしてそのことは、彼をほかの者よりすこしまともにした。なぜなら、彼の輝かしい人生の上に、小さな暖かな影があったのだ。

このことは、もうトンカの助けにはならなかった。でも、彼の助けにはなった¹⁴⁾。(S.306)

「他者」であるトンカについて言葉で描写する試みは、冒頭で述べたように、登場人物である“彼”の試みであるだけでなく、作品を成立させている言葉の試みでもある。冒頭の部分に凝縮して現れているように、一つ

13) この、“彼”がこれまで信じてきた思考の形式は、ムーゼル自身がエッセイで用いた、'ratioid' という概念に相当する。この概念と、ムーゼルの文学観との関連については、次の拙論を参照されたい。

濱崎 桂子：試みとしてのエッセイ ―エッセイに現れるムーゼルの文学観― [『学学院大学大学院ドイツ文学語学研究』第18号、1994、39～52頁]。

14) この結末は、“彼”だけが、「他者」との出会いを通じて新たな思考と言葉を獲得したことを暗示している。トンカが「他者」との出会いを生かすことができなかつたのは、彼女にとっての「他者」が、大きな共同体を形成しており、トンカとその言葉を排除し、その「言語ゲーム」を受け入れなかつたからである。

のイメージを固定させない語りは、「雪のひとひら」を静止したものとしては描かない。決してその姿を現さない、しかし服についた草の実のようにまとわりついて離れない「他者」を描くための言葉は、たえず変化するもの、異質なものを取り込みうる、定点を持たない言葉でなければならないのである。一つの滴のように見える言葉は、そのまま凝固することなくたえず別の形を模索する。輪郭が失われた滴の運動は限定されることがなく、「他者」について問い続ける「言葉」は、多様なイメージを無限に産み出すのである。

„Tonka“ - Die Sprache des Anderen

Keiko Hamazaki

In „Tonka“, die letzte Novelle der Novellensammlung „Drei Frauen“ von Robert Musil, wird die ‚Alterität‘ der weiblichen Figuren in der besonderen Beziehung zur Sprache charakterisiert. Die Titelfigur Tonka, die meistens durch die Perspektive des männlichen Protagonisten beschrieben wird, zeigt sich nie deutlich. Sowohl der Er-Erzähler als auch Leser geraten in Verlegenheit vor der ‚Undurchsichtigkeit‘ dieses Mädchens. Die Unbegreiflichkeit von Tonka hängt im zweifachen Sinne von der Sprache ab; die andere ‚Sprache‘ von Tonka und die ‚Sprache‘ des Textes, die das Andere zu beschreiben sucht.

Die Schwierigkeiten der beiden Figuren, sich zu verständigen, erklären sich durch ihre unterschiedlichen Regeln innerhalb ihrer eigenen „Sprachspiele“ (Wittgenstein): Wenn sie auch den gleichen Begriff ‚Arbeit‘ gebrauchen, gebrauchen sie das Wort doch in einer jeweils anderen Bedeutung. Tonkas Sprachspiele und ihre Regeln werden von der Gesellschaft nicht aufgenommen, weil ihre ‚Sprache‘ immer von der bürgerlichen, wissenschaftlichen Wertvorstellung als ‚wertlos‘ angesehen wird. Gerade deshalb spricht Tonka als „étrangers“ (Kristeva) nur wenig, „(l)angsam. (s)tockend.“. Andererseits der junge und begabte Chemiker, ‚er‘, dessen Sprache in ihrer Deutlichkeit und Überzeugungskraft gesellschaftlich anerkannt wird: er erfährt erst durch Tonka und ihre „Sprache des Ganzen“ oder ‚Stummheit‘, daß es überhaupt das andere Gebiet gibt, das er mit seiner

Sprache nicht erfassen kann.

Sein Versuch, Tonka, oder „etwas, das weder sprechen kann, noch ausgesprochen wird“ trotz alledem mit seiner (neuen) Sprache zu beschreiben, ist gleichzeitig der Versuch des Erzählers, diese Undurchsichtigkeit mit den Mitteln literarischer Sprache darzustellen. Die flüchtigen Eindrücke des Anderen werden zunächst in einzelnen Bildern niedergeschrieben, dann wird jedoch gleich die Gültigkeit der Bilder in Frage gestellt, und sie werden korrigiert und nochmal anders ausgedrückt. Die ‚Tropfen der Sprache‘, die sogleich an Kontur verlieren, haben die Möglichkeit, der Unendlichkeit der Bilder doch noch gerecht zu werden.

(学習院大学助手)